シンポジウム 1

「秘策！中国四国地域で広める医療者教育連携」

～わたしの実践事例お話しします～

岡山大学　医療教育統合開発センター[1)]、山口大学医学部附属病院　先進救急医療センター[2)]
高知県立大学　看護学部[3)]、鳥取大学　医学教育総合センター[4)]
万代康弘[1)]、河村宜克[2)]、井上正隆[3)]、三好雅之[4)]

医療者が抱える、教育・連携での悩みを実際にどのように解決したか、教授システム学(ISD)をどのように応用したかなどの実践例を４名の話題提供者がお話しします。進行方法はラウンドテーブルディスカッションで、参加者は数名ずつに分かれて、４つのテーブルを順々に移動しながら、それぞれのテーブルの話題提供者と対話しながら進行します。対話を通して参加者の疑問解決の一助となりましたら幸いです。

本セッションの最後に日本医療教授システム学会中四国支部会の今後の連携と活動内容を提示します。

主な内容は、以下の通りです。

1) 教育者養成（FD）の方法
2) 大学と病院を結んだ教育者育成の連携
3) 看護教育における大学と病院の教育連携
4) 医学科クリニカルクラークシップや看護学科病院実習の改善
5) 教育改善のための仲間の増やし方
6) 教育研究者の論文作成支援

進行方法：1 ラウンド 20 分×4 テーブル
時間内出入り自由ですので、ポスターセッションの合間にも是非ご参加下さい。
最後の 10 分で中四国支部紹介と今後の活動提示します。

・ 参加者に役立ったことを post-it へ記載してもらい、総会期間中会場で掲示予定です。

シンポジウム 2

医師養成教育におけるアクティブラーニングの展開

広島大学医学部附属医学教育センター[1)]、高知大学医学部附属病院総合診療部[2)]、
香川大学医学部医学教育学講座[3)]、自治医科大学情報センター[4)]
座長： 松下 毅彦[1)]
シンポジスト： 松下 毅彦[1)]、瀬尾 宏美[2)]、西屋 克己[3)]、淺田 義和[4)]

大学教育において“アクティブラーニング”の用語を耳にするようになって久しい。しかし、平成 24 年の中教審答申で、今後の大学教育のあるべき方向として「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」と謳われてからは、大学教育へのアクティブラーニングの導入は、もはや国を挙げての一大イベントになった感すらある。日本中の多くの大学が導入に取り組み、医学部においてもさまざまなかたちでの導入報告を随分目にするようになってきた。

さて、現在のアクティブラーニングは本来の目的を達成できているだろうか。従来の知識伝達型講義を主体とした教育が見直され、アクティブラーニングの導入が望まれたそもそもの目的は、主体的に考え行動するスキルと習慣を身につけ、生涯にわたって学び続ける姿勢を持った学生を育てることにあったはずである。しかし、近年の学会発表などをみていると、「とりあえずやってみました」、「従来の講義をアクティブラーニングに変えたらテストの点が上がりました」、「アンケートを取ったら学生が満足していました」等の報告が多いように思われ、アクティブラーニングの導入によって最終的に達成するアウトカムは何なのかという点は、必ずしも十分意識されていないように感じられる。

本シンポジウムでは、TBL(team-based learning)、反転授業、グループ内で作業をさせるグループ学習法の３つの具体的なアクティブラーニングの手法をご紹介いただいたうえで、アクティブラーニングの導入によって何が達成されるのかというアウトカムに特に焦点をあて、今後の医学教育におけるアクティブラーニング展開の方向性を改めて考えてみたい。